

私は朝の謁見の間を抜け出して、城の裏手にある林道を全力で駆けていた。

風を切る音と、すぐ後ろで必死に追いかけてくる靴音が重なる。

「はぁ……はぁ……姫様っ！　お、お待ちくださいっ！」

「もう、サイラスったら遅い！　置いてくわよ！」

私は振り返らずに栗毛の愛馬に跨ったまま、長い金髪を靡かせて駆ける。

朝露に濡れた草がスカートを叩き、頬が冷たい。

「だ、だめですって！　王女様が一人で城外へなんて……国王陛下に殺されます！　俺が殺されますってば！」

「だったら早く追いつきなさいよ、サイラス！」

私は馬の腹を軽く蹴る。一気に加速し、林を抜けて草原へ飛び出した。自由だ。

この瞬間だけは、王女とか跡継ぎとか、そんな重たいものから解放される。

背後で悲鳴が上がった。振り返ると、サイラスが顔面から草原に突っ込んだらしく

尻を高く掲げてぴくぴくしている。

「……もう、またなの？」

私はため息をついて馬を止めた。近づいてみると、案の定、鼻血を出している。

「だ、大丈夫ですか、姫様……！ 怪我は……ありませんか……？」

「怪我してるのはあなたでしょ？ バカじゃないの、毎回毎回……」

私は馬から降りて、懷からハンカチを取り出した。サイラスは慌てて立ち上がろうとして、また尻餅をつく。

「動かないで、まったくグズなんだから」

私はしゃがみこんでサイラスの顔を覗き込んだ。長い睫毛に朝露がついて、銀色の髪が乱れている。整った顔立ちは相変わらずで、鼻血さえなければ絵になるのに。

「ほら、じっとしてて」

ハンカチで鼻血を拭ってやると、サイラスがびくつと震えた。

「ひ、姫様の手で……そんな……」

「うるさい。黙ってなさい」

私は少し乱暴に拭った。近い。すごく近い。子供の頃からずっと一緒にいたのに、最近こうして顔を近づけると、妙に胸がざわつく。

「……もう、なんでこんなにポンコツなのよ」

思わず呟いた。

「すみません……俺なんかじゃ、姫様の従者なんて務まらないのに……」

「当たり前でしょ。昨日だって、お茶を運ぶときに三回こぼしたし、一昨日は私のドレスに墨汁こぼしたし、その前は——」

数え上げたらキリがない。父上が「恩があるから」とサイラスを城に置いたけど、正直、役に立たないにもほどがある。でも。

「……でも、子供の頃からずっと、そばにいてくれたのはサイラスだけだった」

小声で呟くと、サイラスがはっと顔を上げた。

「ひ、姫様……？　今なんて？」

「なんでもない！　さ、立てる？　もう帰るわよ」

私は馬に跨り直した。サイラスは慌てて、また足を滑らせて転ぶ。

「……ほんとにポンコツ」

私は笑いを堪えきれなかった。でも、こんなポンコツ従者が、私には必要だった。誰よりも私のことを見てくれる。誰よりも、私のわがままに付き合ってくれる。だからこそ、最近この距離が苦しい。男として、意識し始めてしまったから。

“姫様”と呼ばれるたびに、胸が締め付けられる。

「ま、まあ……今日は、私のわがままに付き合ってくれて……ありがとう」

サイラスが、ぼかんとした顔で私を見た。

「え……あ、いえ！　そんな！　俺こそ、姫様のお側にいられるだけで……！」

顔を真っ赤にして、慌てて視線を逸らす。その仕草がまた、すごく可愛くて。

「……バカ」

私は小声で呟いて、馬を走らせた。心臓が、うるさいくらいに鳴っていた。

その日は、隣国からの使節団が城に滞在して三日目だった。

夕刻の謁見の間は、華やかな宴の真っ最中。絢爛なシャンデリアの下で貴族たちが笑い、楽団が優雅な旋律を奏でている。

私は、いつものように隅の椅子に腰掛け、あくびを噛み殺していた。

「姫様、お飲み物をお持ちしました」

差し出された銀の杯。受け取ろうとした瞬間。案の定、サイラスが足を滑らせた。

赤ワインが私のドレスの胸元に真っ赤な染みを作る。

「っ！　ご、ごめんなさい姫様っ！！」

周囲の貴族たちがざわめく。私はため息をついて、立ち上がった。

「……いいわ、着替える」

サイラスは真っ青な顔で頭を下げ続ける。

「本当に申し訳ありません……！　俺なんか、ほんとに……！！」

「うるさい。さっさとついてきなさい」

私はサイラスの手を掴んで宴の間を抜け出した。廊下に出ると、私はドレスの裾を摘んで小走りになる。

「姫様、走ったら転びますよ！」

「あなたにだけは言われたくないわ！」

私は思わずサイラスの手を強く握り返した。その手は大きくて、少し震えていた。

着替えの控え室に着くと、私は扉を閉めて鍵をかけた。

「脱がせて」

「……え？」

「べたべたして気持ち悪いでしょう？ 早く」

サイラスは耳まで真っ赤になりながら、私の背後に回った。

震える指で紐を解き、濡れたドレスをゆっくりと肩から滑り落としていく。冷たい空気が肌に触れた瞬間、私はふっと悪戯心を灯した。

「……ねえ、サイラス」

私は振り返らず、肩からドレスをさらに下げた。胸のふくらみが危うく覗くか覗かないかの、絶妙なラインまで。

「ひ、姫様……?」

背後でサイラスの息が明らかに乱れる。私は鏡越しに、そっとサイラスの顔を盗み見た。そこにいたのは、いつもの弱気なサイラスじゃなかった。頬は赤く染まり、目は熱を孕んで、私の裸の背中から胸元へと釘付けになっている。そしてズボンの前がはつきりと、恥ずかしげもなく盛り上がっていた。

(……おつきく、なってる……)

胸の奥が、じん、と疼いた。私はわざとゆっくりと息を吐き、肩を小さく揺らしてドレスをさらに一センチ下げた。

「どうしたの? 手が止まってるわよ? さっさと着替えさせてよ」

「……っ!」

サイラスが慌てて視線を逸らす。けれど、鏡に映るサイラスの股間は、もう隠しうもなく張り詰めていた。私は唇の端を吊り上げ、甘く囁いた。

「ねえ、サイラス……今の私、どう思う？」

サイラスの喉が、ごくりと鳴った。それだけで、私の下腹の奥が熱く疼いた。

私はまだ、振り返らない。ただ、鏡越しに見つめながら、静かに微笑んだ。

サイラスは真っ赤になって俯いたまま、震える指でドレスの紐を解いていく。私はわざと両手で髪をかきあげ、胸のふくらみをぐつと前に突き出すようにして鏡越しにサイラスを見た。

「……ひ、姫様」

サイラスのズボンの前はもう隠しようもなく布地を押し上げていた。それなのに、必死に両手を握りしめて、私に触れようとしなない。

「サイラス？ どうしたの？」

私はもう一步踏み出し、わざと胸を揺らしてみせる。薄い下着越しでも乳首の形が浮かびそうなくらい、ぴったりと張りついているのが自分でもわかる。